

教師のためのケースメソッド入門

— 学校づくりの実践 —

概要

ケースメソッド(Case Method、事例討議法)とは、実際の出来事を記述したケース教材を元に、自らが当事者ならばどのように意思決定するかをまとめた上で、集団で討議を重ねる教育法である。

- 1 学校づくりの意思決定を**疑似体験**
- 2 **個人**で、**集団**で学びを深める
個人学習→グループ討議→クラス討議→レポート作成
- 3 ケースリーダーは、**集団の自主的討議**をリードする
- 4 継続的学習による「**学習コミュニティ**」の形成

ケースメソッドを基本とした教員研修、大学院での教育実践をふまえて、その学習法の特徴とポイントを整理する。ここではスクールリーダーを対象とした学校づくりのケースを扱う。スクールリーダーの経験と知恵を組み込みながら、討議を通して意思決定能力を高めるケースメソッドの可能性を実践的に検討する。これは教師一般に応用できるものである。

1. ケースメソッドの普及

- ・ 1930年代よりハーバード大学ビジネススクール(HBS)で本格的実施、慶應義塾大学ビジネススクール(KBS)、世界のビジネススクール(MBA)で普及。
 - ・ 近年、医療・看護・福祉、そして教育の分野で導入。
 - ・ スクールリーダー・プロジェクトでの実践。
2010年 スクールリーダー・セミナー(SLS)で実験的試行、
第10回スクールリーダー・フォーラム(SLF)
 - 2011年 堺市、伊丹市のスクールリーダー研修、夜間大学院、
第11回スクールリーダー・フォーラム(SLF)
 - 2012年 京都市、吹田市のスクールリーダー研修、夜間大学院
- ◎実践報告者として、元兼正浩、浅野良一、佐野享子、安藤輝次、丸山恭司、西尾範博、岡田加奈子、水野由香里の各氏が上げられる。

2. ケースメソッドの特徴

"case method", "case method of instruction", "case method of teaching", "case-based learning"などと表記。

ポイント1 (全般)

- 1 学習者が討議用に作成された**ケース教材**を読み解いて、直面する課題に対して、その「**当事者**」ならばどのような**意思決定**(総合的判断)を行うのか、だれに何を働きかけるのか、その根拠は何かを示すことが基本。
- 2 学習の流れは、状況分析→問題発見→問題分析→問題解決の順。
- 3 学習のプロセスは、**個人学習**、**グループ討議**、**クラス討議**(individual reading, group discussion, class discussion)の3段階。

ポイント2 (討議)

- 1 **討議**は、グループ別に行われた後で、クラス全体で改めて行われる。
- 2 参加者は、この討議で自分の意見を**発表**し、他者の意見を**傾聴**し、講師のリードによって思考が刺激される。
- 3 その中で、自らの意思決定の内容や根拠をより明確にしたり、修正したりするなど、変化に富む学習を進めていく。
- 4 ケースについて意思決定する過程で、参加者**自らの経験**や**知見**が反映され、他者の多様な判断や考え方と出会う中で、知的な「**化学反応**」が起きる。
- 5 自分の思考パターンやくせに気づき、自らを**振り返る**機会となる。

ポイント3 (ケースリーダー)

- 1 ケースリーダーはこの学習プロセスを見通して参加者に助言すると共に、クラス討議では**ディスカッションリーダー**として参加者の意見を板書しながら交通整理し、討議を**ファシリテート**(促進)する役割を担う。
- 2 ケースリーダーは、ケースメソッド授業(クラス討議)の準備と運営に多くのエネルギーを注ぐ。

3. ケースメソッドの学習プロセス

定式化された理論と技法に基づく、複雑な学習・教授過程

- ① ケースリーダー(ディスカッションリーダー)
- ② ケース教材
- ③ 学習者集団
- ④ 学習の場・条件

<個人学習>

- 参加者は、**前もって**配布されたケースを読み込み、事前課題レポートを作成。
- ・当事者としてケースの課題を把握し、どのような意思決定をするかを考える。
- ・ケースに付された「**設問**」を意識して、ケースを読む。
- ・自分の考えをメモして、レポートにまとめる。

<グループ討議>

- グループ(6名程度)に分かれて、お互いの分析を検討
- ・個人学習の成果を持ち寄り、グループで議論する。
- ・ケースを多様な角度から分析していく場とする。

<クラス討議>

- 参加者全員が集合して、講師がリードしながらクラスで討議を実施
- ・参加者は、自分の考えや意見を述べる。
- ・参加者は、他者の考えや意見に耳を傾ける。
- ・講師は、ディスカッションリーダーとなって、参加者の自主的討議を誘導する。

<個人レポート作成>

- 参加者は、各自の学習のまとめと振り返りを実行
- ・学習体験を文章化し、まとめと振り返りをしっかり行う。



写真1 グループ討議

※ 1グループを6名程度で構成



写真2 グループ討議

※ ライティングシートを活用



写真4 クラス討議

※ 意見の交通整理を行うリーダー



写真5 クラス討議

※ 他のメンバーの意見を聞き合う

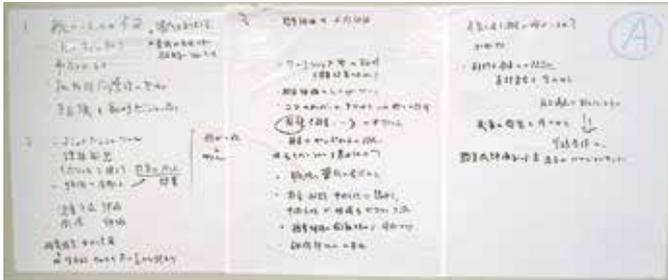


写真3 グループ討議でライティングシートに記述された内容

※ 事前の個人学習でまとめた意見を討議し合う

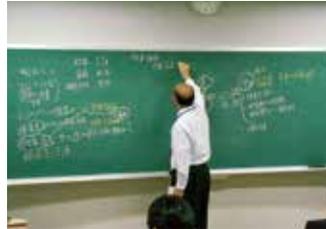


写真6 クラス討議

※ 多くの意見を板書するリーダー



写真7 クラス討議

※ 最後にケース教材の当事者が登場

ケースメソッド導入の3つの壁

- 1 ケース教材を作成することは、思うほど難しいことではない。校長・教頭やミドルリーダーが、日頃体験している経営問題を素材として、ミニケース(2000字程度)にまとめることからスタートして、本格的なケースを作成する。
- 2 ケースメソッドを実施する場合は、大学・大学院の授業でも良いが、ケースメソッドによるスクールリーダー教育を考えるには、同学の人々や学習意欲をもつスクールリーダーに呼びかけて研究会を持つのが良い。
- 3 ディスカッションリーダーは、先達が行う授業の観察やビデオ視聴で学ぶことができる。
竹内伸『ケースメソッド教授法入門』は、ケース授業を編集したDVD 2枚が付けられている。

ケースメソッドの有効性

- 1 視点の異なる他者との意見の交流から、自分の考えがブラッシュアップできる。
- 2 身近な事例のケース教材から、「もし、自分だったら?」と立場を置き換えたり、自分と同一化したりして考えることができる。
- 3 ケースメソッドのユニークな学習方法により、さらに自らの思考の向上が図れる。

配布文書

- ・大阪教育大学SLP編『ケースメソッド入門』大阪教育大学教育経営学研究室、2012。
- ・小山将史・大脇康弘「スクールリーダーのためのケースメソッドの有効性—管理職・ミドルリーダー研修を事例として—」大阪教育大学実践学校教育研究 第15号、2013。

参考文献

- ・第11回スクールリーダー・フォーラム報告書『次世代スクールリーダーの育成』大阪教育大学・大阪府教育委員会・大阪市教育委員会合同プロジェクト、2011。
- ・第12回スクールリーダー・フォーラム報告書『スクールリーダーの学びの場—理論知と実践知の対話—』大阪教育大学・大阪府教育委員会・大阪市教育委員会合同プロジェクト、2012。
- ・大脇康弘編『学習するスクールリーダー—ケースメソッド入門』慶應義塾大学出版会、近刊
- ・岡田加奈子・竹鼻ゆかり編『教師のためのケースメソッド教育』少年写真新聞社、2011。
- ・竹内伸『ケースメソッド教授法入門』慶應義塾大学出版会、2010。
- ・一橋ビジネスレビュー編集部編『ビジネス・ケースブック2』東洋経済新報社、2003。
- ・小樽商科大学ビジネススクール編『MBAのためのケース分析』同文館出版、2010。
- ・バーンズ・クリステンセン・ハンセン編、高木晴夫訳『ケース・メソッド教授法』ダイヤモンド社、2010。
- ・ウィリアム・エレット、斎藤聖美訳『ケース・メソッド学習法』ダイヤモンド社、2010。
- ・東北大学経営学グループ『ケースに学ぶ経営学』有斐閣、2008。
- ・福澤英弘『人材開発マネジメントブック』日本経済新聞出版社、2009。

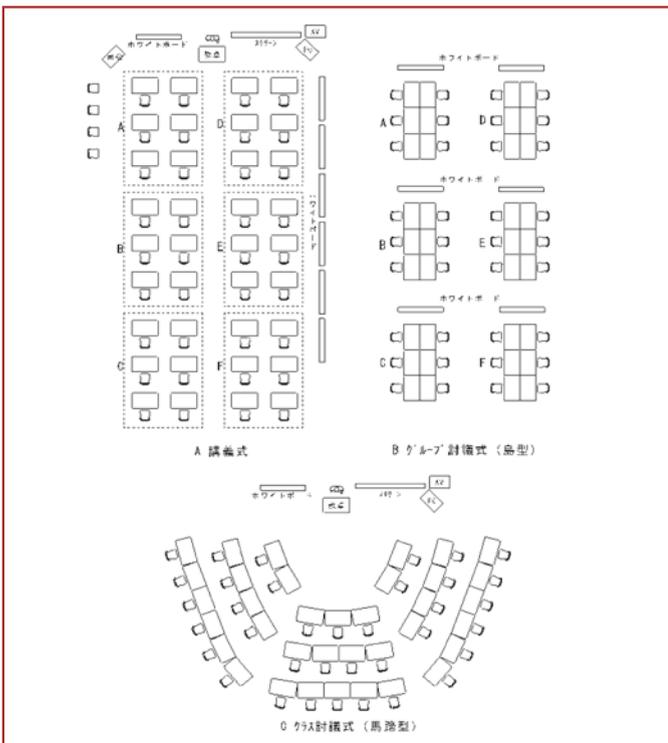


図1 ケースメソッドでの机配置

※ グループ討議ではBの島型、クラス討議ではCの馬蹄型の机配置

時間配分(スクールリーダー・セミナー)

- | | |
|----------|--------|
| 1 個人学習 | 120分 |
| 2 グループ討議 | 40~60分 |
| 3 クラス討議 | 60~90分 |

○個人レポートの作成

事前課題レポート(A 4判1枚)にまとめ、討議に参加。セミナー終了後に、自己の学びを振り返るレポート(A 4判1枚)を作成する。